

ミステリへの憧憬、あるいは 散漫なる読書のすゝめ

中村あき

(筆名・高61回)

「犯人はあなただ！」と見得を切る名探偵、怪しげな館とその住人、密室、暗号、嵐の孤島——。一般にミステリと呼ばれる謎解き物語が好きで、好きが高じて自分でも書くようになりました。少々ですが、出版に至った著作もあります。推理作家です、と名乗りたい。名乗らせてほしい。名乗つてもいいよね？

記憶の底の「あのね日記」

幼少の記憶をひっくり返して、数少ない作家っぽいエピソードを探してきたので披露します。小学2年生の時、休日の宿題に「あのね日記」というのが出ました。担任の先生が一から考えたアイデアなのか、指導書に載っているメジャーなネタなのかはわかりませんが、書きがどことなく『アンネの日記』と似ていて洒落ています。

この日記には一つだけルールがあります。それは「先

てことは、しかりありませんでした。それどころか、進級するに従って本自体めつきり読まなくなってしましました。『ハリー・ポッター』シリーズが流行った時に少し読んだかな？　ただそれも熱が続いたのは『炎のゴブレット』くらいまでだったと思います。中学はバスケ部、高校では軽音班に入つてそれなりに打ち込んでいました。おかげで高校時代なんて図書館をまともに利用した記憶がありません。オリエンテーションで1冊だけ借りた気がしますが、年単位で借りっぱなしにした挙句に紛失、書店で買い直して返した覚えがあります。今では深く反省しています。よい子は真似しないでね。

ミステリとの出会い

読書熱が再燃したのは大学に入つてからです。やりたいことも特になく東京の大学に進み、あまり友達もできず退屈だったので本を読むことにしました。大学生といえば岩波文庫。片手に携えているだけでなんだか頭よさそうに見えますよね。所収されている日本や世界各国の文学作品、古典の学術書をいろいろつまんで読んだはずですが、それについては本稿では割愛します。正直あまり思い出せない……のでは決してなく、この後に衝撃的な出会いがあり、そちらに意識を全部持つていかれてし

まつたのです。本当です。事実、後から振り返ると、あの本、そしてそのジャンルとの出会いが、私が今歩んでいる道を決定づけたと言つても過言ではありません。その決定的な一冊が清涼院流水さんの『ジョーカー』です。ジャンルは言わずもがなミステリ。私はそれまでミステリといえば、アニメの『名探偵コナン』くらいしかなじみがなく、それも流し見だったでの、意識的にミステリというジャンルに触れたのはこの時が初めてでした。しかしその内容は相当尖っていました。というより、やりたい放題でした。流水作品には「日本探偵俱楽部」という共通の設定が出てくるのですが、そこには何百人という名探偵が所属しています。一人ひとりキャラが濃くて、必殺技のような推理法を持っています。例えば、九十九十九（人名です。つくもじゅうく、と読みます）は「神通理気」という推理法によつて、推理に必要な手掛かりが揃うと一瞬にして真相を悟ることができます。……これだけ説明すると無茶苦茶ですが、『ジョーカー』には他にもミステリの名作を下敷きにした意欲的な仕掛けがこれでもかと盛り込まれていて、これに私はすっかり陶酔、ミステリというジャンルにどっぷりはまるきつ



清涼院流水著
『ジョーカー』



●なかむら・あき
飯田市生まれ、高森中出身。兼業作家。2013年、第8回星海社FICTIONS新人賞を受賞し、デビュー。2021年、第3回双葉文庫ルーキー大賞を受賞。好きなものは本格ミステリとロキノン系バンド。

illustration by CLAMP

かけになりました。

清涼院流水さんはメフィスト賞という賞でデビューしていました。受賞作には尖ったミステリが多いことで有名です。私はさらなる出会いを求めてメフィスト賞作家の作品を読み漁るようになりました。さらにその過程で私はミステリ界で起こっていた「新本格」というムードメントを知ります。古典的ミステリを踏襲しつつ、新たなトリックやロジックの先鋭性を模索した作品が次々発表されていたのです。これらももちろん追いかけて読み、さらには元ネタを知るために並行して国内・海外の古典も廻っていました。この時の読書は、掘れば掘るほど面白いものが見つかる、本当に幸せな体験でした。

新人賞受賞、デビュー、それから

何を思ったか、大学3年生の頃、自分でもミステリを書いてみようと思い立ちました。きっかけはよくわかりません。ただ背中を押したのは、やはりミステリへの憧れだったのかな、と思います。面白いものをこれでもかと見せられるうち、「自分でもやつてみたい!」と火がついたのでしょう。気づいたら動きかされるようにパソコンのキーを叩いていました。それなりに苦心しながら書き進めたと記憶していますが、やはり自分の手で一

からパズルを編んでいくことには未知の興奮と楽しががありました。だからこそ誰に見せるでもない膨大な文章を最後まで書ききることができたのだと思います。

さて、ここに一つの小説が完成しました。私の、私による、私のためのミステリ——のつもりだったのですが、実際に書き上げると自分以外の誰かに見てもらいたくなのです。ですが、その度に少しずつ改稿して別の賞にチャレンジ。そして2013年、私は星海社FICTIONS新人賞を受賞し、デビューに至りました。

デビュー作は『ロジック・ロック・フェスティバル』といって、高校生たちが謎を解く学園ミステリです。実は舞台となる高校は飯田高校をイメージして書いています。主人公達が通うのは県下有数の進学校「鷹松学園」。年に1度の文化祭である「鷹松祭」が盛大に行われているさ中、とある事件が起きます。気になった方はぜひお手に取ってみてください。CLAMPさんによる美麗なイラストが目印です。ちなみにシリーズあと2冊出ていますので、そちらもよかつたらぜひ。

デビュー後、小説一本で食つていけていればかつこよかったです。私が今、普通に会社勤めをして、いわ



ゆる二足の草鞋を履いています。仕事から帰ってきて寝るまでの間、あるいは休日を使つてちょこちょこと小説を書く毎日です。いえ、実際は書いちや消し、書いちや消し、でなかなかものになりません。ばんばん新作を出しているわけでもないので、「いま第一線」というコーナーに寄稿する資格があるのか、今さらながら不安になつてきました。

それでも今年3月、久々の新作を上梓したので宣伝させてください。書名は『チエス喫茶フィアンケットの迷局』。

ス喫茶フィアンケットの迷局集。プロ・アマ不問の双葉集』。プロ・アマ大賞を受賞した作品です。チエスをモチーフにしたミステリですが、事前知識は必要ありません。殺人や重犯罪でない、いわゆる「日常の謎」を解き明かす物語なので、ここまでマニアっぽい語りにちょっと引き気味の方も、肩の力を抜いて楽しめるはずです。よしともさんが担当してくださった表紙絵もキュート。ぜひチェックしてみてください。

そんなこんなで、行き当たりばつたりで今の道を行く私です。ひたすらに夢を追い、苦難の末それを叶えた、



近著『チエス喫茶フィアンケットの迷局集』

人生がただ一度であることへの抗議

「日常の謎」ミステリの第一人者・北村薫さんは、「小説が書かれ読まれるのは、人生がただ一度であることへの抗議」と言いました。あなたが人生という道に迷い、思い悩む時、小説が心の支えになつてくれることがあるかもしれません。まったく不条理なこの世の中で、あえて理をもつて謎と解決とを華麗に結びつけるミステリが救いになることがあるかもしれません。

ぜひそうであつてほしい——と願う一方、そんな難しいことを考えなくとも、読書つて楽しいよね、ということを伝えたくてここまで書いてきました。多方面で活躍されている諸先輩方には釈迦に説法ですが、若い方はぜひ今のうちからいろいろ読んでみてください。で、気が向いたら自分で何か書いてみるのもいいですよ。つらいことも多いので積極的におすすめはしませんが、覚悟を持って一步踏み出す同士を、私は歓迎します。